

■学校経営のポイント

伴走者のゴール

喜名 朝博

「あんなことも、こんなこともしてあげたかった」「もっと伸ばしてあげられることがあったのではないか」「もう少し時間があれば…」年度末、教師は少なからず後悔の念にかられる。卒業学年を担当していれば、その思いはより強くなる。

担任することの意味

「担任する」の辞書的な意味は、ある特定の仕事を引き受けることである。それが教育現場で使われると、仕事だけでなくその子自身、その子の成長を引き受けると解される。その思いが強すぎるとプレッシャーになることもあり、学年や学校全体で見ていくことを前提に考えたい。それでも、担任として子どもたちの人生に関わるという自覚と責任感が、教師の成長の原動力となっているのは確かだ。

子どもたちは自分の力で成長していく

「教師は指導する人」という思いが強いと、教えなければ、できるようにしなければといった強迫観念にとらわれてしまう。「教師が教える」から「子どもたちが学ぶ」へと指導観が変わってきているなか、教師には、コーチやファシリテーターとしての役割が大きくなっている。子どもたちが自ら考え、試行錯誤しながら成長できる環境を整えることが、教師の職責である。

指導か支援かの二項対立ではない

生活科の創生期、これからは指導でなく支援であるといった言説が広がった。そして今、子どもたちが自ら学ぶことを大切にしようとする、教師は指導か支援かの二項対立に陥る。子どもたちが主体性を発揮するには、教師は指導しないことが正しいといった考えも出てきた。しかし、それは指導を放棄していることに他ならない。

教師がその主体性を発揮する場面を指導ととらえ

れば、指導しなければならぬ場面があるのは当然だ。知らないことの知る術を知らない子どもたちに自分で考えなさいというのは酷なことだ。子どもたち自身では判断できないこともたくさんある。

大事なことは、子どもたちの状況を見逃して一方的に指導するのではなく、「必要な支援をしながら共に学ぶ」というスタンスである。教えてあげようという上からの態度も不遜である。教師は子どもたちより長く生きているだけであって、決して完璧な存在ではない。教師は子どもたちとともにゴールを目指す伴走者であると割り切れば、何をすべきかが明確になってくる。

伴走者としての教師

この1年、伴走者として子どもたちと共に走ることはできただろうか。遠くから「ガンバレ」と無責任に声をかけていなかっただろうか。子どもたちに紛れて走るだけでなく、集団のペースメーカーになるべき場面でその役割を果たせていただろうか。適切な励ましやアドバイスで学ぶ意欲を引き出すことができただろうか。

ゴールでの教師の学び

年度末、もうすぐ伴走が終わる。しかし、伴走者のゴールはテープを切って終わりではない。ゴール地点で立ち止まり、走ってきた道と子どもたちの変容を振り返って自らの学びとすることが教師の成長の術である。後悔を後悔で終わらせれば、また同じことを繰り返す。伴走して得た実践知を教師としての学びとし、伴走力をアップデートしていくことが教師の成長である。「このリフレクションを次の子どもたちとの伴走に生かしていく」と、離れていく子どもたちを見送りながら約束しようではないか。

(きな・ともひろ=国士館大学教授/全国連合小学校長会顧問)

● 2025・2026 今、子どもたちに伝えたい ●

入学式・卒業式の校長式辞 42 選

学校講話・メッセージ研究会【編集】 A5判/定価 2,530円

■本の詳細の確認およびご注文は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

